# 死者とカミのあいだ――ヤスクニの思想と語られる死者の系譜――

佐藤　弘夫

## はじめに

今回の発表では、(1)「死者を語る」ことがいかなる社会的・歴史的意味をもっているのかを考える、(2)その作業を通じて新たな脱領域的研究の方向性と可能性を追求する、という二つの課題に取り組みたい。

まず前者について、今日死者を語ることの代表といっていい靖国神社の問題を取り上げる。そこにおいて構築された、国家のための戦死者を神に祀り上げるシステムをより広い空間的・時間的な座標軸に位置づけ直すことによって、この問題を学問のレベルで新しいステップに引き上げることをめざす。

特定の死者を超越的存在＝カミとみなす現象は普遍的に存在するが、死者とカミとの関係性は時代と地域によって大きく変化している。靖国神社の源流はしばしば平安期の御霊信仰に求められるが、庶民が超越者を媒介することなしにカミに上昇する現象は、近世に入ってはじめて一般化するものだった。この発表では、中世から近世にいたるヒトガミ観念の変貌、およびその背景を探ることによって、靖国を生み出す思想基盤がいかなるプロセスをへて確立していったかを考えてみたい。

後者については、これまで蓄積されてきた諸分野の研究成果に目配りしつつ、十九世紀全体を見通す歴史的なコン

テクストのなかで靖国問題の意義を問い直したい。幕末はさまざまな文脈においてヒトガミが語られ、だれもがヒトガミの主体たりうるという観念が民衆の間に定着した時代だった。他方では、通俗道徳が大衆に受容され、個人の努力が自身を変え、社会を変えることができるという信念が社会に浸透していく。こうした思想状況を踏まえ、近世―近代の交点に靖国を位置づけて、その歴史的意義を再考する。

これらの考察を通じて、政治的論争が先行しがちな靖国問題を学術レベルの問題に引き戻し、その重要性を確認するとともに、それを掘り下げるツールとしての思想史という学問のもつ可能性について論じてみたい。

## 1　ヒトガミの思想の系譜

靖国神社の特色は、国家のために命を捧げた人物を神として祀る（以下、これを「ヤスクニの思想」と呼ぶ）ところにある。

死者の霊がいつまでもこの世に残って子孫を護り続けるというヒトガミの観念が、日本人の伝統的な思想にもとづくものであることは、柳田國男に始まり、現在でも多くの研究者や知識人の認めるところである。それは今日流通する日本文化論の常識ともなっている。そうしたなかで、今日しばしばヤスクニの思想の起源として指摘されるものが、平安時代の御霊信仰である。

しかし、私は古代・中世の御霊信仰とヤスクニの思想の間には、本質的な相違があると考えている。靖国神社に祀られた人々はごく普通の庶民だった。それに対し、古代社会で暗躍する御霊はいずれも名の知れた権力者であり、その多くは政治闘争の敗北者たちだった。御霊が神として安定的な信仰の対象となる中世になると、天神様＝菅原道真が十一面観音の垂迹とされたように（『北野天神縁起』）、その背後に不可視の超越神（本地仏）が想定され、御霊はその化現と位置づけられるようになった。

ヤスクニの思想の特色は、中世の御霊やヒトガミと違って、その背後により高次の超越的存在を想定しない点にあった。遠い他界の根源神の光に照らされて輝くのではなく、聖性を内在するのが靖国神社の神々だった。内面に光源をもつこうしたタイプのヒトガミの出現は、日本列島では十六世紀なって初めてみられる現象だった。

はじめは、それは豊国大明神となった豊臣秀吉や東照大権現となった徳川家康などの天下人だった。その後、天皇や大名が続き、江戸時代も後半になるにしたがってヒトガミとなりうる階層はしだいに降下していった。特別な修行

を経ることなく、生前の事績によってだれもがカミとなりうる時代、それが十九世紀の社会だったのである。

近世のヒトガミを考える際にいま一つ注目される現象は、民衆宗教を中心とした、人が生きながらに神とみなされる、いわゆる「生き神」の増加である。民衆宗教では幕藩体制下の身分制社会そのものが批判されることはなかったが、カミとしての尊厳を根拠として、身分や性差に左右されることのない万人の平等が説き出された。

近世におけるカミとしての覚醒は、中世のそれと違って宗教的な意味での悟りではなく、個々人がおのれの職分と役割を遂行することを通じて社会のなかで自分を輝かすことだった。かくして幕末の列島には、無数の小さき神々がここかしこに簇生するのである。

## 2　記憶される死者

靖国神社の問題を考える際の不可欠のキーワードが「ヒトガミ」であるとすれば、もう一つのそれは死者の「記憶」である。靖国神社は死者を神として顕彰することによって、その記憶を永遠に留める装置としての役割を果たすものであった。

日本列島では、自然の忘却の過程に抵抗して、一般の人々が死者を記録に残すための人為的な装置を作り出すようになるのは、近世といわれる時代のことだった。死後浄土に生まれ変わることが理想とされた中世では、死者は基本的に匿名化した存在だった。中世の墓地では、埋葬者の名前を記した墓碑が建立されることはなかった。それに対し、死者の名を刻んだ墓碑が十六世紀ごろに出現し、江戸後期には庶民層にまで広がっていく。死者がこの世にいてはならない時代（中世）から、いつまでも身近に留まって生者と交流を続ける時代（近世）への転換が起こるのである。

遠い浄土に実在する絶対的な救済者に対する信頼が薄れた近世社会では、この世に留まる死者が子孫による世代を超えたケアを通じて、欲望や怨念などの俗世の垢を少しずつ削ぎ落としながら、神としてのご先祖様へと上昇していくことがあるべき姿と考えられた。人間こそが幸福な死者を作り出す主役であり、浄土の仏はもはやその脇役にすぎなかった。「ホトケ」になるとは生死を超えた悟りを開くことではなく、折々に子孫たちと交流を重ねながら、草葉の陰で安らかに眠り続けることだったのである。

折しも、親から子孫へと安定的に継承される「家」の観念が社会に定着する時代である。農業生産が不安定で、人口の流動も日常的だった中世では、死者に対する世代を超

えた供養など望むべくもなかった。安定した家が確立して初めて、死者に対する長期的な記憶とケアが可能となったのである。

日本の近世では、死者は生者との長い交流を通じて安定した存在へと上り詰めていくと考えられるようになったため、長期にわたる先祖神への変身の途上で、死者が忘却されたり、供養が中断されたりすることがあってはならなかった。記憶の継続がその人物の生きた証であり、死後の命運と不可分の関係をもつと信じられる時代が到来するのである。

近世社会では、継続的な祀り手をもたない死者は「無縁仏」とよばれて恐れられた。記憶の重要性の浮上が、その対極に忘却への恐怖感を増幅させていくのである。

## 3　鯰絵のコスモロジー

江戸時代に入ると「ヒトガミ」と「記憶」がキーワードとして浮上し、幕末に至ってますます重みを増した。なぜそうした現象が起こるのであろうか。このような疑問をもったとき、想起されるのが江戸時代の民衆思想を解析した安丸良夫の仕事である。

安丸が一九六五年に発表した論文「日本の近代化と民衆思想」（後に『日本の近代化と民衆思想』青木書店、一九七四年、に収録）が取り上げたテーマは、石田梅岩や二宮尊徳の説いた「通俗道徳」だった。彼は戦後の知識人が前近代的として見過ごしてきたこの領域に、江戸時代の庶民層が来るべき近代社会の担い手に成長していく痕跡を見出そうとするのである。

勤勉・倹約・和合という言葉に集約できる梅岩や尊徳の通俗道徳は、一見すると古めかしい儒教的な封建道徳そのものであり、民衆を体制の枠内に封じ込める支配イデオロギーのごとくである。しかし、民衆はそれを自発的に受け入れ、生活規範として日常的に実践することによってその価値を内面化し、能動的・主体的な人格の形成へと結びつけていった。安丸はそこに、近代社会形成期に特有の広範な人々の主体形成のプロセスを読み取ろうとする。日本の近代は一握りの特別な思想家や啓蒙主義者の論説から生まれたのではない。その前提には、民衆レベルでの意識改革と自己鍛錬の積み重ねがあったのである。

社会秩序の遵守を求める通俗道徳は、民衆を支配者に都合のよい鋳型にはめ込む役割を果たした。だが、他方では自身が受容している道徳律の普遍性を基準として、支配者や権力者の不正や奢侈を批判しうる視座を提供するものだった。その視座を体得した人々が幕末の世直し運動のリー

ダーとなり、明治期においては自由民権運動の主役となっていくのである。

幕末は、「ヒトガミ」と「記憶」というキーワードに示される、庶民層における平準化と自己の存在承認への欲求がピークに達した時だった。通俗道徳はその庶民層に受容され、人は身分に関わらず自己と社会を変える主体となりうるという新しい人間観を生み出していった。そうした自意識と批判的な視座を身につけた人々が、大量に出現するのが十九世紀という時代だったのである。

いまや庶民層における社会変革への欲求はほとんど臨界点に達していた。身分制社会を解体し、等質な「国民」からなる近代国家の創成へと向かう幕末維新期の変革の底流をなしていたものは、明治維新後に実施された上からの政策や知識人による啓蒙活動ではない。ヒトガミ観念の浸透と記憶保持への切望に示される、上昇と水平化を志向する新たな人間観の浸透だった。

幕末維新期の動乱は、数百年の時を経て熟成され高まってきたそのうねりが既存の硬直化した身分制度に突き当たり、それを押し破ろうとする大規模な地殻変動だった。それゆえ幕藩体制が倒壊し内乱が収束しても、「自由」と「民権」を求める民衆の引き起こす強い余震が長く継続することになったのである。

## 4　招魂社から靖国神社へ

幕末の動乱を経て成立した新政府は、社会の根源的な変革を求める民衆の願望と運動の後押しを受けて誕生したものだった。そのため、民衆の上昇志向を力づくで圧殺するという選択肢はありえなかった。

列強の脅威に対抗しうる強力な統一国家を創出するためには、江戸時代を通して鍛え上げられた民衆の主体性をいかにして国家に対する忠誠に転換し、新体制の基盤強化に資していくかが最重要の課題となった。身分制の外套を脱ぎ捨てた近代国家建設の前提として、国家への自発的な献身を厭わない「国民」の創出が不可欠だった。この課題に対して維新政府がとった方針は、天皇を中心とした「一君万民」体制の実現だった。そのためには天皇の地位を、他の人間から隔絶した究極の高みにまで引き上げるとともに、天皇に直結する形で国民の平準化を成し遂げていく必要があった。

ただし、身分制の廃止は一君万民のシステム実現のための重要なステップではあったが、あくまで必要条件にすぎなかった。幕末に渦巻いていた民衆のエネルギーを国家へ糾合するには、封建体制下の身分的なしがらみから開放さ

れたばらばらの個人を、天皇のもとへ引き寄せる強力な磁力が必要だった。その磁石の役割を担ったのがヤスクニの思想だったのである。

戦死者を神として祀る靖国神社の淵源としてしばしば論及されるのが、長州藩の奇兵隊における招魂祭祀である。幕末の巷には、人々の強烈な上昇志向と平準化への希求を背景とした「ヒトガミ」の姿が満ち溢れていた。また、自身の存在証明と死後の平安の前提となる「記憶」の維持が切望されていた。戦死した仲間を身分に関わりなく神霊として敬い、個人名においてその行動を顕彰して永く記録に留めようとする招魂祭祀は、まさにそうした民衆の願望に応えることを目的としたものだった。

長州藩において確立した招魂祭祀は、やがて新たな段階を迎える。国家による招魂事業の吸収である。神としての祭祀を希望するという形で噴出していた人々の上昇と平準化への欲求が、新国家の精神的な機軸に据えられた天皇に対する帰依に結びつけられた。身分を超えた常備軍＝国民軍を創出するとともに、その任務をまっとうして天皇のために命を捧げた者は神として再生し、永遠に人々の記憶に留められて祭祀を受け続けるというヤスクニの思想が、ここにその全貌を露にするのである。

## 5　ヒトガミを生み出す装置

近世社会は、だれもがカミになりうる可能性をもった時代だった。しかし、実際に神として祀られるためには、他人のために命を捨てるといった英雄的な行為が必要であり、普通の人間が主体的にそれを実践することは困難だった。一般民衆が大挙して神に上昇するためには、ヒトガミを量産するための安定したシステムが必要だった。

本人も予想しない形で死後に神に祀り上げられた人物を別にすれば、幕末の段階で大量のヒトガミを生み出す装置と触媒は二つ存在した。一つは、民衆宗教である。そこでは、土着の神と教祖を触媒として、教団の構成員を神に上昇させる論理と制度が作り上げられていた。もう一つは、人を神に転換させる触媒として天皇を想定するものである。山崎闇斎の垂加神道と国学の系譜がそれであった（前田勉『近世神道と国学』ぺりかん社、二〇〇二年）。長州藩における奇兵隊の招魂祭祀の背景にあったのは、この思想的系譜だった。

ヤスクニの思想の直接の源流はここにあった。招魂社から靖国神社へと展開する国家による戦死者慰霊は、垂加神道や国学の系統においてすでに論じられ実践されてきた天

皇を媒介とするヒトガミ創出の論理を公認し、国家的レベルで大々的に遂行することを意味したのである。

幕末の内乱で落命した「官軍」の兵士は、神となって招魂社に祀られた。ここでは戦死者は天皇のために落命したがゆえに、神として祀られるのである。そのために、天皇は通常の人間とは次元を異にする聖なる存在＝「現人神」でなければならなかった。彼らは護国の神となって天皇のそばに控え、永遠にその偉業を称えられ記憶されるのである。靖国神社へと続くヒトガミ信仰が、近世以来の伝統を引き継ぎつつも、天皇制国家にふさわしい装いをもってここに再生した。近世に高揚する人間の能動性と可能性を肯定する思潮は、こうして天皇制国家の論理に絡めとられていくのである。

それと並行して、天皇を介在しないヒトガミ創出のシステムの排除が進められた。民衆宗教は天地開闢説やその世界観において、古代の神話世界から多くの素材を調達しており、新たに形成されつつあった近代の国家神話と多分に共通する側面を有していた。しかし、逆にそれゆえに、そのコスモロジーが天皇制を支える神話に抵触した場合、大本教のように容赦ない弾圧を受けることになった。民衆宗教は、天皇制を批判したか否かではなく、天皇制国家にそぐわない独自のコスモロジーを有していたという一点において、異端の刻印を背負わされる宿命にあったのである。

ヤスクニという威力の根源は、日本固有の伝統でも、近代国家による上からの押し付けでもなかった。近世を通じて肥大化し続けた被支配階層の閉塞感と承認の欲求に解放の道筋を示し、国民国家の形成へと導く役割を果たすものだった。それは「ヒトガミ」と「記憶」に現れた被支配層の願望をほぼ完全に、しかも先取りする形で満たすものだった。ヤスクニの論理を承認し国民国家の形成にみずから積極的に参画することは、幕末維新期の庶民層が身分制の桎梏から開放され自己の社会的承認を勝ち取るためのほとんど唯一の手段だった。ヤスクニの思想のもつ重みはまさにこの点にあったのである。

## おわりに

最後に指摘しておきたいのは、本論でキーワードとした「死者の記憶」を切り口とする、海外諸地域との比較研究の可能性である。死者が匿名化する時代から個々の名において長く記憶される時代へ。これはこの列島だけにみられた特殊な現象なのであろうか。それとも、人類史がある段階で経験する普遍的な現象だったのだろうか。

中世ヨーロッパでは、大方の死者は教会に運び込まれて、

その敷地内に無造作に埋葬された。いったん葬られてしまえば、個々の遺体を判別することはまったく不可能だった。だが、近代社会に入ると、故人の名前と生没年、事績を刻んだ墓が作られるようになる。多くの地域では、国民国家の形成にともなって軍人墓地が誕生し、国家に命を捧げた人々が身分の枠を超えて長く顕彰されるシステムが構築される。匿名化する死者から記憶される死者への転換がみられるのである。

こうした問題意識を保持しながら、諸地域における死者の記憶の問題を比較考察することによって、近代国民国家の特質とその意義についても、新たな視覚から光を当てることができるのではなかろうか。

＊『思想』二〇一五年七月号（特集：「戦後」の超克）に掲載された論文「ヤスクニの思想と記憶される死者の系譜」は、本発表の内容を敷衍したものである。

（東北大学教授）